

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(5):

一実践編(目次)——英語に愛されない私たちの行動原理「目的は手段を正当化する」

<http://eetimes.jp/ee/articles/1208/09/news004.html>

今回から「英語に愛されないエンジニアのための新行動論」の実践編に入ります。エンジニアが海外に出張または赴任したときに突き当たる困難にいかにか立ち向かうか、10回に分けて解説します。私たち「英語に愛されないエンジニア」は、異国の地で泥を啜(すす)っても、仕事を完遂するのです。そのための手段に是非はありません。

2012年08月09日 08時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

今回から「[英語に愛されないエンジニアのための新行動論](#)」の実践編に入ります。しかし、実践編の導入部だけで連載の4回分を使い切るというこの私の無謀さ、無策さからして、予定くらいは立てておかないと、この連載がどこに行ってしまうのか分かったものではありません。そこで、私がこれからの連載で執筆を予定している「英語に愛されないエンジニア」のための10の新行動論の概要(目次)を説明させていただきます。

[\(準備編\)英語に愛されないことは私たちの責任ではない](#)

準備編としてお伝えしたいメッセージは、「私達が『英語に愛されないエンジニア』となってしまったことは、私たちの責任ではない」ということです。次回からの本編では、この責任の所在については「おりこみ済み」として、この連載では二度と「言い訳」として使えないようにします。

(1) パラダイムシフト編([前編](#)、[後編](#))

「英語に愛されないエンジニア」である私たちが立ち向かわなければならないものは、「英語」ではありません。私たちが既に陥っている「英語」に関する誤解を解いていただいた上で、私たちが本当に必要とし、利用するものの正体を明らかにします。さらに、それを取り扱うために、私たちが到達しなければならないパラダイムと、そのパラダイムへのシフト方法についても説明します。

(2) 文献調査編

英語で記載された文献を、いかに短時間で手を抜きつつ理解するか、あるいは理解したかのように自分を納得させるか……。さらには、上司や同僚に「あなたが理解した」かのように思わせるか(誤認させるか)という点に注力して説明します。

(3) 資料作成編

英語で資料を作る場合に、どのようにすれば英語の資料として完成しているかのように「見せるか」という所に力点を置いて説明します。加えて、実際の業務資料としても使えるようにするか、という方法についても解説します。

(4) 海外出張準備編

ここでは「英語」という観点を離れて、海外出張を命じられた場合の準備について、私の体験談などを紹介します。特に、時差ボケ対策に必要な不可欠な睡眠薬の合法的な入手方法や、やってはならないアルコールとの組み合わせなどについて、私の「命をかけた」ノウハウを公開します。もちろん、日本医師会やその他の医療機関からの矢のような批判は覚悟の上です。

(5) 出国・入国、ホテルチェックイン編

成田空港での出国審査は、まあなんとかかなるとして、問題は入国審査です。私の目の前で、入国審査官に拉致されて小部屋に消えていった後輩の体験談も交えながら、海外出張の入口でつまづいてしまう辛さについて、そして、ホテルフロントとの会話において、想定されるトラブルとそのトラブルシューティングについて、とくと説明します。

(6) プレゼンテーション編

この辺りから本格的に、「英語に愛されないエンジニア」として、本領を発揮する「秘伝」を公開します。ポイントは、非核3原則と同じです。英語での議論が必要になるような話題を「持たない」、「作らない」、「持ち込ませない」です。

(7) 質疑応答・打ち合わせ編

ここが、本連載の最大の山場になります。「英語を使わない英会話」というむちゃな打ち合わせ方法を提示します。ただし、この技は、相当に周到な準備が必要であり、場合によっては、皆さんを失意または激怒させるかもしれないことを、あらかじめご了承ください。

(8) 赴任編 (インターミッション)

ちょっと例外的ですが、万一、海外に長期間送り込まれることになった場合の生活インフラの立ち上げや、どのように家族のメンタルをケアするべきか……ではなくて、あなたが、家族にどのようなメンタルケアを「してもらうか」を説明します。海外で闘うのは「あなた」だけではなく、家族も含まれており、その責務から、家族の誰も「逃げられないこと」を、きっちり分かっていただきます。

(9) 撤収編

海外出張が、望む形で完了したとしても、目も当てられないような悲惨な形で終わったとしても、どのような結果であれ、私たちはこの出張の「落とし所」を見つけて、撤収を図らなければ

なりません。人類史上いかなる戦争においても極めて難しいとされてきた「撤収作戦」を、海外出張の観点に置き換えて、私の経験を交えつつ説明します。

(10) 報告編

会社の命令によって出張してきた以上、報告書の提出や、報告会でのプレゼンテーションは不可避です。報告は客観的かつ具体的に行う必要があります。しかし、本連載の「新行動論」においては、「あなた以外は、誰もその場にいなかった」という事実特にスポットを当てます。「どんな報告をしたところで、誰にも分かりゃしない」という観点から、十分なサポートを行うことなく私たちを海外に送り込んだ者たちへの、ささやかな報復についても論じます。

インタビュー相手も募集中!

その他、我が国のエンジニアの英語教育に関して責任のある方へのインタビューなどにも挑戦したいと考えています。思い付くのは、やはり文部科学省や経済産業省、外務省の大臣閣下、あるいは事務次官の皆さまです。それが駄目なら担当部署の責任者の方々、それも駄目なら匿名インタビューでも、私の門戸は広く開いております(本気です)。ご希望の方は、編集部でも私に直接でも結構ですので、ご連絡ください。

□

さて、正直に申し上げて、こういう、脱法的というか、背任的というか、信義則違反というか、そういう「技」を公開することが、本当に皆さんの利益になるのかと考えると、私も相当に悩んだり――などは、これっぽっちもしておりません。

「英語に愛されないことは私たちの責任ではない」ことは、[前回](#)明かにしました。そして、英語に愛されない者の、愛されない者なりの闘い方が、正々堂々として、清く正しいものになるなどという、そんな都合の良い話があるわけがありません。私たち「英語に愛されないエンジニア」は、異国の地で泥を嚙(すす)っても、仕事を完遂するのです。そのための手段に是非はありません。いにしえよりの格言通り、「目的は手段を正当化する(The end justifies the means.)」のです。

執筆者の江端氏、「実は英語ができる!？」

「『英語に愛されないエンジニア』のための行動論」の執筆者である私、江端智一が、「実は英語に愛されていた」という疑惑が、今、まことしやかにささやかれているそうです。このうわさの出どころは、諸説ありますが、1つにはEE Times Japan編集部であるとも言われています。

もし、これが事実であるとするなら、空前絶後、前代未聞の大スキャンダル。不実な言葉で埋めつくされた原稿を執筆し続け、「英語に愛されている」くせに、「愛されていない」フリをして、薄ら笑いを浮かべながら、日々の生活において英語に苦しむエンジニアを、実に4カ月もの長き間、愚弄(ぐろう)し続けていたこととなります。もし、私が読者の立場だったとしたら、絶対に許さない。社会的な大不祥事の当事者として、国会の証人喚問の対象になったとしても当然であり

、「法が裁けないなら、この手で……」と、私なら執筆者に対して処罰を行使することをためらいません。

しかし、私は正真正銘の「英語に愛されないエンジニア」です。文字通り、「残念なくらい」に英語に愛されていません。以下の2つの事実から、このテーゼを立証します。

(1) 悲惨な大学受験の歴史

私の大学志望校の進学を、最後まで徹底的に妨害したのは、「英語」という受験科目でした。こんなに一生懸命に勉強していた私に対して、「英語」は最後まで冷たかった。

高校の英語の教諭は、間接的ではありましたが、「こんなに英語を真面目に勉強しながら、ここまで成績に反映されない生徒は見たことがない」ということを暗に私に告げていましたし、予備校の模擬の偏差値や、そして受験の合否結果は、もっと直接的に「うん、あんたの英語はダメだよ」と告げていました。英語という教科さえなければ、私は、日本の大学どころか、私は「米国」や「英国」の大学にすら合格していたという自信があります。

今、私は自分の娘たちに語っています。「全ての若者には無限の可能性がある。ただし、英語が邪魔をしない範囲において」と。このように、大学受験の段階において、英語と私の関係は最悪の形で完成したのです。

(2) 私が喋る英語に対する周囲の評価——「すごい」

第2の論証は、実施例でご紹介します。ある飲み会の席でのこと。欧州の会社と数年前に打ち合わせをしたときの思い出話になりました。そのとき、一緒に働いていた英語が堪能な外注先の女性が、私に言いました。

「江端さんの英語は、本当に『すごい』です」。——「すごい」。私は、英語に関してこの「すごい」以外の評価をもらったことが、一度もありません。

「あのさあ、その『すごい』っていうのは、私の英会話は完璧で、100%の意思疎通ができていたっていう意味かな？」

「いいえ、違います」

「じゃあ、正しい発音と用語で、英語を使用していたという意味だね？」

「いいえ、違います」

「あ、そうか。英語には多々問題はあったものの、取りあえず仕事は完遂したという意味だ」

「いいえ、違います」

「えー!? それじゃあ、一体どういう意味なの？」

「文字通りです。江端さんの英語は『すごい』んです」

「はあ？」と、私が首をかしげているところに、上司や同僚、後輩がわらわらと集ってきて、そして、私の回りで言い出しました。

「うん、そうだ。江端の英語は『すごい』」

「確かに、あれはすさまじい」

「あれほど、『すごい』英語は見たことも、聞いたこともない」

「よく、あんな『すごい』英語が使えるものだ」

分かりますか。皆さん。これまでの人生において、誰一人として、私の喋る英語が「通じる」とも「分かる」とも「役に立つ」とも、そして、「私の英語で助かった」とも、ひと言も言われたことはないのです。

さらに、これを裏づける証拠を、もう1つ追加しましょう。昨年、仕事でイギリスに出張したのですが、その関係者から「江端さんは、今回もロンドンで元気よく『宇宙語』を喋っていましたよ」というメールが、私以外の関係者に流れていたそうです(もう、バレています)。ここから導かれる結論は、1つしかありません。私が使っているのは「英語」ではなく、どうやら地球上の知的生命体には理解が難しい特殊な音声信号である、という事実です。

まとめます。

(1) 私の大学受験の英語の回答欄には、おそらく英語以外の何かが記載されていたと思われます。採点者は首をかしげながら、不合格の判定をしたのでしょう。

(2) 私が英語と思って使っている言語は、英語以外の特殊な信号に変換されて出力されており、今なお、その状態が続いていることが客観的に認められます。

上記の事実より、本連載の著者である江端智一が、「英語に愛されていない」というテーゼは、一片の疑義なく、真実であるという結論に至るわけです。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

